

祝塩田教授古稀

松 木 本 興

塩田先生が祖山の学苑に奉職せられたのは、大正十四年で、祖山学院が中等部五年、高等部三年制の各種学校としてしか認められて居なかつた頃であつたが、富木堯広先生が教頭で、亀口龍謙、遠藤是妙、高田恵忍、中条（現山内）是明、永倉唯嘉等の諸先生が居られた中へ新に谷山ヶ丘から塩田先生が加り、教授陣としては押しも押されぬ黄金時代を呈したのであつた。爾来三十五年、富木、高田両師早く逝き、亀口先生草深き興津から静岡感応寺へ晋まるゝと共に学苑を辞し続いて病床の人となり、昭和二十年静岡大空襲時、教へ子である現感応寺住職伊藤（旧姓望月）海伯師の看護を受けつゝ、阿倍川原の煙と消へ、中条師去つて福井の師跡に入り、永倉師亦文部省に転じ、遠藤教授も池田の本山本覚寺へ晋まるゝと共に学苑を去り、今は藤枝の大場、蒲原の渡辺、函南の山崎師等と相携へて詩境を築まれて居られる。各学匠中塩田先生唯一人孜孜として戦争末期自坊信立寺が戦災の為め全焼し、幾辛酸を嘗めても倦まず撓まず学苑に通いつめられ、本年古稀を迎へられたというから今日迄経た半世を祖山教学の為に捧げられたわけである。

塩田先生が基石を握つたのを見たことがある、ラケットを手にしたのを見たことがある、其の筆になる一筆画及び

俳句を拝見したこともある、茶道にも趣味があるらしいが其の深さは知らないが、何れも行きづりの寄り道に過ぎないではないか。唯郷土史と文化財の研究には己に一家の見を持って居らるゝ事は我人共に許す所であるが、然し是も先生の趣味の一面であつて、先生の命をかけて居らるゝ所は宗学の研鑽であつて、此の点日蓮宗々学研究所々長の望月歆厚先生と相俟て宗学界の双壁であると私は尊敬して居る。

先生の筆になる「日蓮聖人の生涯」は沢山ある聖人伝中最高の水準を行くものとして、聖人伝研究の指針と称すべく、是と共に身延教報に連載された「聖人をめぐる人々」は、大聖人を囲む人々を知る好材料であるが、その他先生の執筆は非常に多く、何れも斯道研究者にとっては一字一字が金字塔の如くに思はるゝが、身延教報としては通俗を旨として居る関係上苦辛された原稿も尚高きに過ぎる感が無いでもないが、棲神誌上に載せられた数多くの論文、学校に於ける講義及び発行せられたる「法華経の研究」「教学概論」等は萬代の下宗学研究家への燈台として推称すべきものである。

本年先生の古稀の寿を祝して、先生の執筆になる論文の題を棲神誌上に輯録し、且つ最近稿成る法華経教学史の研究の発行を学校及び知己各位の協力を結集して完成したいと思う。

人生七十古来稀なり、とは昔の人のタメ息であつて、現在に於いては七十は壮年の部類である。塩田先生よ、願くは今後更に五十年七十年宗学研究の為に不撓不屈の精進を続けられんことを。